

アウグスティヌスの言語論

加藤 武 著



創文社

加藤 武 (かとう・たけし)

1925年東京に生まれる。1951年東京大学文学部哲学科卒業、都立多摩高等学校、神代高等学校教諭をへて、立教大学教授、1991年定年にて退職。

〔訳書〕アウグスティヌス『キリスト教の教え』教文館、1988年（アウグスティヌス著作集6）

〔論文〕「意味の光——アウグスティヌスの verbale Ästhetik」美学史研究叢書、6、1980年、他。

〔アウグスティヌスの言語論〕

一九九一年六月二五日 第一刷印刷
一九九一年六月二〇日 第二刷発行

定価五九七四円
(本体五八〇〇円)



著 者 加 藤 武

発 行 者 久 保 井 理 津 男

印 刷 者 中 内 康 児

発 行 所 株 式 会 社 創 文 社

本 社 102 東京 都千代田区一番町一七一三
仮事務所 112 東京 都文京区関口一四四一七

振 電 話 03 二三三五四三六一
替 東 京 二九二四七二

曉印刷・鈴木製本

ISBN4-423-17074-4

Printed in Japan

はじめに

アウグスティヌスほど、ことばを大切にした思想家はすくない。かれの思索の中心にはことばの問題がある。記号論というよりも、言語論にその本領があつた。

本書は第一部においては、言語哲学的な視点から、第二部においては、解釈学的な視点から、その言語論に光をあてようとする。第三部においては、アウグスティヌスの『キリスト教の教え』を讀者とこいっしょに読むことをこころみたい。それはこの『教え』が西欧における、古代中世を通じて最大の言語論のテキストであるのに、特に日本では、これまでほとんど知られていない状況があるように思われるからである。

わたくしはアウグスティヌスにおけるへことばの本质を尋ねてゆくうちに、へことばの底にへ声という固有な層が深く隠れ、大きく横たわっていることに、ようやく気付いた。

テキストへの文献学的な接近の手続きが、あるいはくどく、ときにわずらわしくおもわれる向きもあろう。しかし、これは避けて通ることができない径である。へテキストに論じることなしに、へテキストを劈くすなわち、問いをたてることはできないからである。讀者のしばらくの忍耐を願う次第である。

目次

はじめに	1
序論 声の現象学へ	3
一 純粹な音	3
二 モノローグとディアローグ	7
三 発語	13
第一部 言語哲学的視点から——声とことば	
アプローチ	16
第一章 声	18
一 意味の光	18
一 甫めての愛	20
二 『告白』一〇・六・八抄訳	21
三 美的判断成立の根拠	23
四 意味の光	29

五 結 論——ことばの美学 (verbale Ästhetik) について	三七
Ⅱ 声	四六
一 序	四六
二 オリゲネスの場合	四六
三 アウグスティヌスの場合	四九
四 結 論	五七
Ⅲ 喚びかけの構造	六二
一 序	六二
二 喚びかけ	六二
三 西田幾多郎における喚ぶもの	六九
四 結 論——喚ぶという場	七一
Ⅳ 喚びかけの場所	七四
一 序	七四
二 場 所	七五
三 レトリカの論理	七九
四 二人称成立の場	八四
五 結 論	八八
第二章 こ と ば	九三

I	沈黙と発語	九三
一	序	九三
二	沈黙 (ORATIO)	九四
三	発語 (TUBILATIO)	九九
四	結論	一〇九
II	根源語——讚美と呻き	一一三
一	序	一一三
二	讚美	一二三
三	呻き	一二六
四	『告白』との対応	一二七
五	結論	一二八
III	光ることば	一三〇
一	序	一三〇
二	光ることば	一三一
三	白い頁	一三〇
四	結論	一三三

第二部 解釈学的視点から——経験と解釈

アプローチ……………	一五
------------	----

第一章 経験……………	一六
-------------	----

Ⅰ ホルテンシウス体験……………	一六
------------------	----

一 序……………	一六
----------	----

二 キケロという人……………	一六
----------------	----

三 『ホルテンシウス』の評価……………	一四〇
---------------------	-----

四 キリストの名……………	一四四
---------------	-----

五 結論——『ホルテンシウス』のあなたへ……………	一四四
---------------------------	-----

Ⅱ メロディア・インテリオル——『美と適合について』……………	一四九
---------------------------------	-----

一 序……………	一四九
----------	-----

二 マニ教の美の観念……………	一五二
-----------------	-----

三 マニ教の二元論……………	一五六
----------------	-----

四 性をもたない精神 (mens sine ullo sexu)……………	一五八
---------------------------------------	-----

五 瞑想的経験……………	一六二
--------------	-----

六 結論……………	一六五
-----------	-----

III	ミラノのヴィジョン——『告白』第七章における神秘経験……………	一七三
-----	---------------------------------	-----

一	問題の所在……………	一七三
---	------------	-----

二	記述の真実性……………	一七四
---	-------------	-----

三	神秘体験か……………	一七五
---	------------	-----

IV	オスティアの経験——l'extase à deux……………	一八六
----	--------------------------------	-----

一	詩篇第四編……………	一八六
---	------------	-----

二	神秘経験の共有……………	一八九
---	--------------	-----

三	声の経験……………	一九四
---	-----------	-----

第二章	解 釈……………	二〇四
-----	----------	-----

I	比喩的解釈……………	二〇四
---	------------	-----

一	序……………	二〇五
---	--------	-----

二	比喩の役割……………	二〇五
---	------------	-----

三	表わす比喩……………	二〇七
---	------------	-----

四	比喩を超えるもの……………	二一〇
---	---------------	-----

五	指し示す比喩へ……………	二一一
---	--------------	-----

六	指し示す比喩……………	二二三
---	-------------	-----

七	比喩の形而上学……………	二二六
---	--------------	-----

八	レグラの階層……………	二二八
---	-------------	-----

九 結 論	三三
Ⅱ 解 釈 の 迂 路	三〇
一 序	三〇
二 scientia の位置	三〇
三 転 機	二四
四 解 釈 学 的 思 索 の 構 造 と し て の 螺 旋 的 思 惟	二四
五 結 論	二九
Ⅲ ドケレの二重構造	二五
一 序	二五
二 旧 修 辞 学 か ら 新 修 辞 学 へ	二五
三 tractare-intelligere	二五
四 ドケレの二重構造	二五
五 'docere, delectare, flectere'	二九
六 伝 達 と し て の ドケレ	二六
七 結 論	二六
第三部 『キリスト教の教え』の言語哲学——『キリスト教の教え』を読む	
アプローチ	二七

I	いつだれのために書かれたか	三六
II	伝達の回路	三六
III	本論のアナリシス——表現と伝達	三五
IV	結論	三四
あとがき		三五
索引		179

アウグスティヌスの言語論

序論 声の現象学へ

一 純粹な音

ことば（パロール）の力をとらえるには純粹な音の性質について、思いをひそめなければならない。音は沈黙の破裂である。それはそもそもの発端であり、出来事の告知である。光アレ、と創造主がいわれると、空間を充たし、存在するものをすべてわれわれに顯らかに示した。しかし創造の働きを遂行するのは、ことばである。というのは、ことばそれ自体は空間に属さないからである。ことばは生きた知恵であって、永遠から時間へ、と降りてきて、意味の空間を充たし、離れたり、融合したりしていることば以外の知恵に呼びかけ、それらを存在に導く⁽¹⁾。

ルイ・ラヴェル（Louis Lavelle）は、その『パロールとエクリテュール』（一九四七年）において、このように、ことばへパロール⁽²⁾をなによりもまず純粹な音（le son pur）としてとらえることを要求する。ことばは、意味よりもまず、純粹な音であるとされる。ラヴェルにとってラングよりもパロールに力点がおかれ、コードよりもパロールに焦点が定められる。音の外に意味があるのでなく、音のなかに意味がある。

音を聞く人はすでに意味を聞きとっている。意味とは内なる光である⁽³⁾。

といわれる。声と意味の關係は密接である。

ラヴェルにとつて言語活動（ランガージュ）の任務は事物を指示することにあるよりも、伝達をおこなうことにある。⁽⁴⁾しかし主体相互の直接の伝達は禁じられている。他者と語るに先だつて、ひとは自己自身と語り、おのれの声を聞く。自己と語るものはだれよりも永遠と語る。⁽⁵⁾この内面の回路を経ることなしに、ひととひとが相互に直接に語りあうことは不可能である。若きラヴェルはごたぶんにもれず、新カント主義の濃厚な空氣の中に出發したが、パリ大学でベルグソンの高貴な息吹に触れて大きな転換をする。やがてプラトン主義的な道を歩むにいたるラヴェルにおいて、言語活動は物質的な事物と靈的なものをむすぶ中間者の位置に属し⁽⁶⁾永遠への梯子として捉えられる。それはすでに記号（シーニュ）以上であり、像（イマージュ）の位置を占めるとされ、ものを物質性からイデア性へと解き放つところにことばの使命があると見る。⁽⁸⁾ことばを古い紙幣のように使い古されたものとしてでなく、その誕生の瞬間において無垢なものとしてとらえようとし、⁽⁹⁾ことばをなによりも純粹な音としてとらえたラヴェルは、声（ヴォア）をその思索と觀察の中心においている。その立場は今日から見ると、いかにも古めかしい衣装をまといあまりにも保守的であると映るかも知れない。しかし早い時期に声を主題化した思索をおこなった稀な先覚者の数にはいると言えるだろう。ラヴェルの世界には特別なもの、異常なもの、鬼面ひとを驚かせるものはなにひとつない。でも、それはあの日常的な題材を描いたフェルメールの絵画のようににげない見慣れたものがどこか黄金色に輝いている。日々刻々言葉を語らない人はいない。声という舞台で毎日素晴らしいドラマが演じられているのに、ひとはなれっこになつてもはや驚かないのである。声という日常使っているものを神秘の光輪がとりまいてるのに気付いていない。ラヴェルはそれをとりだし主題化した。

ここで、古代末期に生きたアウグスティヌスが『告白』第十一巻で時間について思索している場面における声（ヴォックス）の役割に光をあてて粗略な素描を試みよう。

小さな事柄のうちに！ 小さな事柄と大きな事柄とに共通する観念をみぬくことが必要である、とコメントしながら、時間論の考察をすすめる。⁽¹¹⁾ 光る天体の運行。ろくろの速度。日の尺度を検討しながら次第に自然科学的なモデルから離れてゆく（二三章二九節）。二六章三三節ではじめて音節を例にとり音節の測定にふれる。でも音節において時間をつかもうとすると、時間はするりとにげる。時間はまだ存在しないか、もう存在しないか、あつという間に目の前をすぎさるか、である。この刻々無に帰してゆきすばやく飛び去る時間をつかまえ、時間を測定しなければならぬ。このむずかしいアポリアをどうすればよいか。そこでかれはまず第一に物体の音響（ソーマス）の観察を例にとる。物体をたたくと、音響はいったん鳴り響いて、やがて消えてゆく。それはある時の間（スパティウム・テンボリス）を占める。そこでこの時の間を測らなければならない。ところが、音が響いている間は測れないので、音が響きやむまで待たなければならない。ところが響きはやむと、もはやないので測れないというアポリアにふたたびおちいる。そこで登場するのがデウース・クレアートル・オムニウム（ものみなをつくりたまひし神よ）と歌われるアンブロシウス聖歌冒頭の一節である。ここではもはや存在しない音節を測るのではなくて、なにか記憶にのこるあるものについて測るのだ、ということに気付く。「過ぎ去るものがお前のうちにつくる受動的印象（アフエクティオ）はそれが過ぎさったときにもずっと残っている」。⁽¹²⁾ しかしこの印象をつくるのは能動的な精神の集中である。ところがこの集中によって、かえって時間は過去・現在・未来の三つの位相に分極し拡散する。ここではじめて時間をひろがりという準空間性をもつものとして、時間を測り捉える手がかりを手にいれたのである。

ところで、こうしたひろがりをもつ時間の構造は、単に歌の場合だけに限られるのではない。

歌全体について生ずることは歌のひとつひとつの部分においても生じます。さらにその個々の音節においても生じます。この同じことは、おそらく、この歌がそのひとつの小単位をなすような、もっと長い行為においても生じます。同じことは、人間のすべての活動がその部分にあたるような人の全生涯に起こるのです。

このおなじことは人の全生涯がその一部分でしかないような、人の子の全世紀においておこなわれるのです。⁽¹³⁾ 初めに彼自身がコメントしたように、小さい事柄と大きな事柄に共通する観念をみてとるアウグスティヌスの思索は、このようにして、一挙に拡大し、全人類の歴史におよんでいる！

以上、天体、ろくろ、音、歌、と、身の回りの実例を手がかりに時間のあり方をさぐってきた。それでは、最後にあげられた歌は、任意の「実例」のひとつにとどまるのであろうか。それは実例なのか。そのように問う人もいる。⁽¹⁴⁾ しかし、それは「たとえば」(ut pote)⁽¹⁵⁾ という書き出しにはじまる実例の最後に登場している点で、あくまで論証のためにあげられた実例の系列に属する。⁽¹⁵⁾ しかも、同時に、歌は単なる実例の域を脱して賛美という人間存在の基本的なアクトをあらわすものとして提示されている。⁽¹⁶⁾ じつは考察のはじめから(さかのぼれば『音楽論』以来)時間の基本モデルとして、声に照準を定めていたのである。

声こそ、アウグスティヌスにとって人間存在の中心的核であり、存在がおとずれる場所である。ラヴェルにおいても声は時間と永遠の中間者としてとらえられていた。声という梯子を登って永遠に到達することを目指す。しかしアウグスティヌスにおいては、時間と永遠は異なる次元に属する。公約数はない。ここには絶対の深淵がよこたわる。ひとはいかにしてこれを超えることができるか。ついには、絶望と断念しかないのであろうか。

『告白』第一一巻第八章一〇節においていう。